

書評：佐藤信弥著『戦争の中国古代史』

下田 誠

著者は『西周期における祭祀儀礼の研究』の大著で知られる殷周史の専門家であり、『周——理想化された古代王朝』や『中国古代史研究の最前線』等の著作により、最新の学術内容・情報を一般にわかりやすく伝える役割も果たす第一線の研究者である⁽¹⁾。

本書執筆の経緯としては、原泰久『キングダム』の人気等も背景に、2018年3月末に編集部からの依頼があったという。渡邊義浩『始皇帝中華統一の思想——『キングダム』で解く中国大陆の謎』が刊行された時は少々驚いたが⁽²⁾、かくいう評者も昨年7月に廃止された教員免許更新製の講師をつとめていた頃（2018年度・19年度）には、コミック『キングダム』を買い集め、現職教員の関心を少しでも引き付けようと工夫をしていたことを思い出す。いわゆる「中国離れ」のような風潮のなかで、一般の人びとにどのように私たちが興味をもっている研究の対象を発信するか、国費や何かしらの公費を投ぜられて育てられてきた私たちの責任の一つであろう。

本書の章立て下記の通りである。節タイトル等は省略する。

序章 戦争の起源

第一章 殷王朝 旬に憂い亡きか

第二章 西周王朝 溥天の下、王土に非ざる莫し

第三章 春秋時代 「国際秩序」の形成

第四章 戦国時代 帝国への道

第五章 秦漢王朝 「中国」の形を求めて

終章 「中国」の行く末

本書は新書であり、一般向けに書かれているものであることから読みやすい図書ではある。ただし、実際のところ、内容は豊富であり随所に著者の創見や思いが示されている。

評に先立ち、評者の立場等について触れておきたい。評者は本書と比較的近い時期に小著『中国文明を読む—国家形成をめぐる協奏』を刊行している⁽³⁾。執筆の内容には、佐藤氏と重なる部分もあり、本評では小著とのかかわりから、述べている点があることを予めお断りしておく。もともと評者は戦国時代の青銅兵器上にみえる銘文を研究してきたこともあり、評者にとっても「戦争」とは避けて通れないテーマであった⁽⁴⁾。評者の自己表現力の低さにより、制度や軍事を研究していると受け止められることもあったが（そうした方面の情報を整理することは研究の前提として必要なことではあるが）、関心を寄せていることは中国先秦・秦漢の社会であり、国家形成である。そうした観点から、本書の評を進めることもご理解いただきたい。著者自身「まえがき」で本書の概要をまとめているが、以下本評では改めて本書の内容を簡単に紹介したい。

一 本書の内容（前半）——序章・第一章・第二章——

まず序章では、新石器時代の状況を戦争に焦点を定め、武器の種類やその出現、戦争の犠牲者、聚落の防御施設等を論じている。評者は自身の小著において佐川正敏氏や中村慎一氏等の研究をあまり紹介できなかったのであるが、本書では「玉鉞は玉璧や玉琮といったほかの玉器と同様に首長階層の地位を象徴す

る祭器となっていたとし、これら首長階層の墓葬より、萌芽的な国家や王が誕生していた可能性を見出す」(20 頁、以下とくに言及がないものは本書からの頁数を示す)と本邦において、比較的早期に国家形成を指摘する研究を取り上げている⁽⁵⁾。また、日本の考古学者が「夏王朝」の語を使用する傾向がみられるなかで⁽⁶⁾、著者は前著『中国古代史研究の最前線』78 頁と同じく、落合淳思氏の主張をふまえ、「二里头王朝」とでも呼んだ方がよいとの見解を示している。

第一章は殷王朝をまとめているが、殷墟に城壁が見当たらないことにかかわり、かつて宮崎市定氏らが殷墟は墓地であり、都城とは認めがたいとした点について触れ⁽⁷⁾、近年の許宏氏による「大都無城」説を紹介している。許氏は「殷墟のみならず、殷以前の二里头遺跡や西周の都城の豊鎬遺跡と洛邑、更に殷の都城でも小双橋遺跡には、外郭あるいは内城と外郭の双方が確認されていないことにより、中国古代の都市は外郭を備えていないのが常態だったのではないか」(本書 31 頁)と指摘していて、興味深い。もう一点、評者の関心からは、王畿の外側に存在するとされる「方国」について、「方国の中には殷王朝に服属するものもあれば敵対するものもあった。殷王朝も方国のひとつであり、かつ最も勢力が強大なものであった」(33 頁)という著者の指摘を重視したい。これは殷という国家の規模や勢力を相対化する視点とみている⁽⁸⁾。また方国の数であるが、孫垂氷氏は 158 あげている(35 頁)⁽⁹⁾。著者によれば、方国との戦争に関する甲骨文は武丁の時代に多く、その後は武丁の子の祖庚・祖甲を経て、廩辛・康丁と進み、また増加してくる。最後は帝乙・帝辛(紂王)である。殷末の主要な敵対勢力は人方・孟方とされ、殷王が親征したという(49 頁)。この戦いは殷側の勝利に終わったようであるが、著者は引き続き落合氏の研究を受けて、殷末の王は「軍事力の強化と祖先祭祀の徹底によって対外・対内両面で王権の強化を進めた」(52 頁)という。そして、この危機への対処が方国側にとっては自分たちへの圧制とうつり、服属勢力の反感を強め、殷王朝を滅亡に導いたと述べている。いわば逆説的な展開である。

第二章は西周王朝を整理する。周は殷の勢力を完全に滅ぼさず、紂王の子の武庚禄父に殷の遺民を与え、武王の弟の管叔鮮と蔡叔度に禄父を補佐させ、殷の故地を治めさせたという(61 頁)。この三人は「三監」と呼ばれるが、著者によれば、周では外服の要衝の地には、諸侯のほか「監」が置かれることがあったという。これはいわゆる「三監の乱」の背景であるが、著者は新出の清華大学蔵戦国竹簡『繫年』の第三章の文脈からは「三監の乱」ではなく、「商邑の乱」と呼んだ方がよさそうであるという。従来、「三監の乱」は管叔・蔡叔らと周公による武王没後の周王朝の主導権争いと解されてきたが、『繫年』や太保簋等の出土資料をあわせると、周王朝成立後も商邑に残存していた殷の遺民が、武王没後の混乱について反乱を起こしたという新たな説を提案している(64 頁)⁽¹⁰⁾。続いて本書の柱の一つである「中国」の形成にかかわり、第二代成王の時の作という金文「何尊」が紹介されている。何尊の銘は「中国」の初出であるが、著者はこの「中国」とは「東国」「南国」と対比される<中央の地域>くらいの意味であると述べる。そして、何尊の文脈に即していえば、『中国』とは、ここではもとの大邑商や成周を含めた殷の首都圏、すなわち殷王朝の王畿を指すのではないかと(69 頁)と指摘していて、考えさせられる。ここから「中国」は拡大していった。西周は第四代昭王の南征失敗のあと守勢にまわり、共王・懿王・孝王・夷王と続くが、第十代厲王は鞅鐘(集成 260)等の長銘の自作器を作る等、特異性を示している。佐藤氏は「昭王以来途絶えていた戎夷に対する親征を再開し、『軍事王』としてのあり方を復興しようとした」(90・91 頁)と評価する。しかしその軍事力なるものはもろいもので、韓国の沈載勲氏のいう「重層性私属関係」に基づくものであり、厲王があっさり追放されてしまう事情と解されている。西周滅亡の要因は、李峰氏により①昭王の南征挫折後の長期的な王朝の衰退・厲王の亡命等の政治的混乱、②厲王の頃からの玁狁の侵攻、③幽王の後継をめぐる内部対立をあげている。

二 本書の内容（後半）——第三章～第五章・終章——

分量的には、なお半分以上あるが、後半はやや駆け足で紹介したい。

第三章は春秋時代のまとめであり、前書『周』同様、『繫年』第二章等も参考に、東遷期、携王のことが触れられている。「邦君・諸正が携王を擁立したのに対し、申侯ら諸侯が平王を擁立し、更に晋の文侯によって携王が殺害された」（115 頁）、そのことから時代の主役の移り変わり——邦君・諸正から諸侯へ——を読み取っている。携王殺害は水野卓の説により、前 760 年としている。もう一つ、主役の交替を印象づける事件が起こっている。東周第二代の桓王は実力をつけた鄭を警戒し、虢・蔡・衛・陳と鄭を攻めたが大敗を喫している（繻葛の戦い）。著者は、戦争のあり方の変化、これまでの周王朝対戎夷等外部勢力との戦いから、王朝内部の争いの比重の高まりを指摘している。また、春秋時代の諸侯国同士が外交や対立を繰り返す「国際政治」が誕生したと述べている（119 頁）。このあとは、「春秋五覇」の時代で、斉の桓公の尊王攘夷から、宋襄の仁、城濮の戦い、そして晋による「覇者体制」が述べられている。「中国」とのかわりでは、渡邊英幸氏と同じく、華夷思想の淵源を求める。蛮夷戎狄は多国間会盟からは排除され、周王朝を奉じる「兄弟甥舅」の諸侯を「中国＝華夏」と位置づけ、蛮夷戎狄と対峙しするものとする（137 頁）。春秋時代にはとりわけ楚による「滅国」が目につくが、晋楚の対立が続くなかで、本書では両国の講話にかかる二度の「弭兵の盟」（前 579 年・前 546 年）にも注目している。春秋後期には晋楚対立に呉越の抗争もからんでくるが、三晋の成立までを論じている。本章でも子犯鐘や趙氏余戈等の出土資料をまじえ、新たな春秋史をまとめている。

第四章は戦国時代であるが、「長い春秋時代」に対し、「短い戦国時代」という著者の認識を示している。著者の見方では、西周滅亡の翌年前 770 前から、覇者体制の維持・再建が放棄される前四世紀の末期までの四百数十年間を「長い春秋時代」と位置づける。対して、それから始皇帝による統一の百年前後を「ポスト覇者体制」を模索する「短い戦国時代」と位置づけるもので（169 頁）、これは吉本道雅氏の覇者体制論を継承するものであるが、佐藤氏のオリジナルの見解ではなかろうか。つまり、前四世紀半ば頃までについて、春秋時代との連続性を重視するものである。また、著者は浅野裕一氏や湯浅邦弘氏の研究に依拠しながら、戦争観の転換も読み取っている。上海博物館蔵戦国竹簡の『曹沫之陳』には春秋時代までのスポーツマンシップともいえる軍礼が反映されているのに対し、『孫子』は不意打ち・騙し討ちのような発想がみられる。また西周時代以来の周王が親征する「軍事王」の伝統も『曹沫之陳』は受け継ぐものであるが、『孫子』では戦争は前線の将の判断に任され、君は後方にあるものとされているという。戦争の形式も戦車戦から歩兵戦に変化した。秦・魏の石門の戦い（前 364 年）では魏側に斬首六万の犠牲が出たと伝える（169～172 頁）。その後、著者は斉・秦東西大国の帝号採用（前 288 年）から胡服騎射に筆を進める。趙は武靈王の時代以後、従来の「中国」に属する趙の人びとともに、遊牧を生業とする胡に属する人びとも支配下におさめることになり、「強大な軍事力を背景として多様な集団を統治したということで」当時の趙は「小帝国」と位置づけられるという認識を示している（194 頁）。これは、きわめて重要な点であるが、評者も類似の考えを過去に述べたことがある⁽¹¹⁾。

第五章は、秦による統一、陳勝・呉広の乱、楚漢戦争、さらに劉邦による前漢王朝の成立、白登山に劉邦が匈奴に包囲されるまでを概論している。秦は前 221 年に斉を滅ぼし、「天下統一」を実現した。征服地には郡が設置された。郡の下には県がおかれ、官吏が派遣された。しかし統一は長く続かない。始皇帝の死後の瓦解は、良く知られているが、著者は宮宅潔氏の研究を引いて、秦が遠隔地の兵たん制度を十分確立しないまま六国征服・占領統治へと踏み出したことが、秦の統一が早々に破綻した一因であると紹介している（222 頁）。佐藤氏は陳勝・呉広の乱から楚漢戦争に至るまでの動乱を、新たな「中国」の形を作

り上げるための苦闘・もがきと評価している（247 頁）。それが漢とそれを支持する諸侯たちによる「郡国制」という形で決着したのであるが、休む間もなく、次の戦いが繰り広げられることになる。それは「匈奴」（秦の頃までは「戎」や「胡」と呼ばれていたという）であるが、著者は内陸アジア史研究者のバーフィールド氏による「草原帝国」という概念を用い、「中国＝漢王朝」と「草原帝国＝匈奴」との間の数十年間にわたる共存関係を認めている。

終章では呉楚七国の乱を経て、中央集権的な「郡県制」に近いものに変質していく過程や「中国」の外側（南越・閩越・匈奴等）との関係の清算についてまとめ、「中国」の古代の終末を論じている。本評もすでに十分な分量を紹介に割いてきていることもあり、最後に著者の時代区分にかかる次のような認識（270 頁）を紹介して終わりとしたい⁽¹²⁾。

様々な勢力間による戦争を通じて「中国」が膨張していき、最終的に「草原帝国」との戦いを通じてその範囲が定まっていく時代を「中国」の古代と位置づければ、両者の代表である漢と匈奴がともに衰退していく武帝の時代以後は、古代の終わり、すなわち「古代末期」の始まりと位置づけられるだろう（西洋史では古代から中世への移行期間として、数百年にわたる「古代末期」という時代区分を設けている）。武帝の時代を生きた司馬遷の『史記』は、神話の時代から「古代末期」の始まりまでを描いた史書ということになる。

三 本書の特色と疑問点

本書は新書という小さなサイズの書籍であるが、扱う範囲は新石器時代から前漢中期頃までを扱うものとして、壮大なスケールをもっている。評者も実はおよそ同じような関心の時間幅（著者はさらに長い時間幅をお持ちかもしれないので、あくまで本書からうかがえる範囲で述べるが）をもっているつもりであり、本書の意義や苦労等もある程度理解できるように感じている。細々と述べないが、「これが大変である」ということは一言いっておきたい。かつ、落ち着いて読んでいけば、一つ一つの文章に視野の広さ、行き届いた先行研究の調査、読み込み等がうかがえる。

本書執筆のねらいは、附記に記載の研究会において著者自身により示されたもので、（一）中国古代の戦争について、制度面や思想面等も含めて総合的に描き出すこと、（二）戦争を通じて「中国」の形成を概観すること、そして（三）戦争を通じて見る「中国」の古代とは、の三点であり、確かにその点において、目標は達しているものとみられる。佐藤氏自身の考えは、本書を通じてよく伝えられているのではないかと。

本書は至るところで、この 30 年ほどの範囲のなかで、日本・中国・台湾等で注目されたドラマや小説等を紹介している。それはキングダムにとどまるものではなく、著者の関心の幅広さをうかがわせる。おそらくは、著者自身としても比較的好んでいるのではないかと想像している。例えば、第一章に紹介される宮城谷昌光『沈黙の王』（29 頁）、鄭問『東周英雄伝』（123 頁・151 頁）、ドラマ「ミーユエ 王朝を照らす月」（196 頁）等である。ただ、そうであれば、ここ数年のなかで注目されたのは、コウラン伝（皓鑾伝）ではないかと思うが、あえてなのか、触れられていないようである⁽¹³⁾。しかし、それは取るに足らないことである。以下に、いくつか評者が疑問に感じた点をまとめておく。

もともと評者は、著者の前著『周』以来、著者の言葉ではなく、高島敏夫氏の表現になるものであるが、「軍事王」「祭祀王」と捉える意味について、今ひとつ理解できないでいた。「国の大事は祀と戎とに在り」（『春秋左氏伝』成公十三年）とは、私たちが春秋時代の国家の特色としてよく知るものであるが、それを「軍事王」「祭祀王」というのは、何を言いたいのかわからない状態であった。本書を検討するなかで、ある特定の時期、王代を特色づけるものとして「軍事王」「祭祀王」とまとめていることはおよそ理解した（87

頁)。とくに戦国時代までを含め、戦争観の転換（既述）を述べる部分に及び（171 頁）、「軍事王」という捉え方の意義も見出したつもりである。つまり、＜西周＞という 300 年に達する期間のなかでの特徴のあらわれ方の違いを捉える視点になるだけではなく、先秦期の変化を大きく捉える時にも有用な着眼点となるということである。しかし、なおわからないのは、「戦う王朝」（60 頁）である。これは前著『周』73 頁も踏まえれば、竹内康浩氏の『中国王朝の起源を探る』から採用した表現とみられる。そのため、直接には評者にはかかわらないところかもしれないが、「戦わない王朝」はあるのだろうか。戦争が絶え間ないのは春秋戦国時代も同様であり、殷代と比較して「戦う王朝」なのだろうか。著者の概述のトーンのなかに多少なりとも影響を与える観点とみられるため、この点は尋ねておきたい⁽¹⁴⁾。

次に「常備軍」に対する捉え方である。これも他の研究者の考えに拠るものかもしれないが⁽¹⁵⁾、『師』は軍隊の汎称であり、殷王あるいは貴族の常備軍（44 頁）とし、西周の六師・八師も一般的に「常備軍」と位置づけられている（74 頁）とのことである。李裕杓氏も「このような体制は、戦時だけでなく平時も軍務に専従するという近代的な意味での常備軍とは言えないのではないか」と指摘するように疑問がある。著者も「そこまで厳密な見方をせず」と述べているが、もう少し別の表現がないか、さらに検討を要する点である。

四 所感

著者もおそらく執筆に際しそのような課題を感じたであろうと考えるのは、「戦争」というテーマの重さである。なぜ人は戦うのか、霊長類生態学や人類進化論から研究されており、サルやゴリラ・チンパンジーと比較して、人類の特徴が探究されている⁽¹⁶⁾。また戦争・戦略研究からも、戦争は政治的なものか、文化的な活動、文化の発露であるのか、見方があるようである。そして「戦争」という対象は人間経験の全体の一部であり、各部分を関係づけることではじめて理解できる、という指摘もある⁽¹⁷⁾。評者自身、はじめに述べた通り、避けて通れないテーマとして、時に関係図書を買って求めてきたが、消化できていないことを今回の評を担当して改めて痛感させられた。評者も手に余るので、このくらいにするが、「帝国」論も同様である。より骨太の議論が求められる。

評者が関心を寄せている国家形成論・国家形成史研究の難しさのひとつは、攻防・変転めまぐるしい各集団の在り方をどのようにとらえるかにある。評者は「殷周秦漢隋唐宋元」と高校生が暗唱する際の起点としての「殷周」ではなく、その規模感や実際の力、または周辺との関係性等を検討するには、一旦、「服属」関係を棚上げして、（陳槃氏や孫亜氷氏等に成果はあるとはいえ）小国・地名を列挙して再検討する必要があると考えている。水野卓氏は『春秋時代の統治権研究』のなかで魯の僖公・文公期（前 7 世紀後半）の画期性を論じており、その点は近作の「春秋時代の『人』」においても、「筆者は春秋時代の統治権を検討した際に、僖公期から文公期にかけて、君主が周王朝の諸侯から一国の君主へと独立するようになる変化を指摘した」と再度言及している⁽¹⁸⁾。このことは読み方をかえれば、春秋中期に、諸国は周のくびきを離れ独立した「国家」（評者の表現では「部族国家」）になったと述べるものと評者は解釈している。本来、このような精緻な研究が求められるのであるが、学会状況からは、なお相対化を進めるための基礎作業が求められている。本書でいえば、「無論こうした服属・敵対関係は固定的であったわけではなく、殷と方国との関係が時期によって変化する場合もあった。実は汴方がその一例であり、殷と敵対していた時期

もあった。殷に服属する方国は汴戡のように何らかの形で殷王朝に奉仕することになるが、敵対する方国は当然殷王朝からは完全に独立している」（35 頁）といった記述等は、そうした評者の関心に応えるも

のである。

著者の議論のなかには、西周時代以外の部分については、本書において初めて公表した考え方も含まれるものとする。本書をアウトラインとして今後議論をさらに発展されることを期待したい。なお、長い時間を対象とする研究に対し、評者も理解不足、誤読もあろうと思う。ご寛恕願う次第である。最後に、本書については、山田崇仁氏による書評もすでに公開されている⁽¹⁹⁾。あわせてご確認いただきたい。

(講談社、2021年3月、1,000円＋税)

附記 本稿は阪神中哲談話会第406回例会(2023年12月16日)の発表をもとに当日の質疑応答等もふまえ、まとめたものである。

註

- (1) 佐藤信弥『西周期における祭祀儀礼の研究』(朋友書店、2014年)、同『周——理想化された古代王朝』(中公新書2396、中央公論新社、2016年)、同『中国古代史研究の最前線』(星海社新書123、2018年)等参照。
- (2) 渡邊義浩『始皇帝 中華統一の思想——『キングダム』で解く中国大陸の謎』(集英社新書0975D、2019年)。
- (3) 拙著『中国文明を読む——国家形成をめぐる協奏』(ブックレット《アジアを学ぼう》57、風響社、2022年)以下、小著と略称。
- (4) 拙稿「戦争はこう変わった」(中国出土資料学会編『地下からの贈り物——新出資料が語るいにしえの中国』東方選書46、東方書店、2014年)。
- (5) 佐川正敏「王と鉞——中国新石器時代の戦争——」(『考古学研究』第42巻第2号、1996年、56頁)。
- (6) 岡村秀典『夏王朝——中国文明の原像』講談社学術文庫1829、講談社、2007年、原載2003年)、宮本一夫『中国の歴史1 神話から歴史へ——神話時代・夏王朝』講談社学術文庫、講談社、2020年、原載2005年)、飯島武次『中国夏王朝考古学研究』同成社、2012年)等参照。
- (7) 宮崎市定「中国上代の都市国家とその墓地——商邑は何処にあったか」(『宮崎市定全集 3 古代』岩波書店、1991年、原載1970年)参照。
- (8) 前掲拙著『中国文明を読む』50頁では、「殷商の集団は『商方』であったのではないかと指摘している。
- (9) 宋鎮豪主編・孫亜冰・林欽著『商代史 卷十商代地理与方国』(中国社会科学出版社、2010年、259頁)参照。
- (10) この部分は佐藤前掲『周』35～42頁に詳しい。また同『三監の乱』説話の形成——清華簡『繫年』第三章により見る——(『漢字学研究』第二号、2014年)において『史記』周本紀等にみえる「三監の乱」説話の形成過程を論じている。
- (11) 拙稿「岐路に立つ韓と魏——紀元前三二〇年代の戦国史的意義について——」(『学芸国語国文』第48号、2016年、36頁)には「漢字を使う諸国は異系文化圏を含む『帝国』の形態をとったことを論じており、別に佐藤氏からも私信をいただいているが、確かに比較的近い認識をもっている」と評者も感じている。
- (12) 時代区分は本書の柱の一つであるが、評者自身のなかで未整理の部分もあるため、本評での発言

は見送ることとする。

- (13) 阪神中哲談話会の席において、内容面を考慮し、コウラン伝に言及していない旨、著者より発言があった。
- (14) 竹内康浩『中国王朝の起源を探る』(山川出版社、2010年)。なお、阪神中哲談話会においては、竹内氏は伝統経学との関係から「戦う王朝」という表現を使用されているとの指摘を受けた。その意味では評者も理解はできる。
- (15) 李発「甲骨軍事刻辞反映的商代軍事組織」(同『甲骨軍事刻辞整理与研究』第四章、中華書局、2018年) 参照。
- (16) 山極寿一『暴力はどこからきたか——人間性の起源を探る』(NHK出版、2007年) 参照。
- (17) アザー・ガット著／石津朋之・永末聡・山本文史監訳『文明と戦争』(下) 解説論文(中央公論新社、2012年) 参照。同書は文庫版も2022年に刊行されている。
- (18) 水野卓『春秋時代の統治権研究』(汲古書院、2020年)の第一部69頁・91頁、終章の339・340頁等参照。また水野「春秋時代の『人』——『国人』『<国号>人』から見る春秋期社会構造の変化——」(『史学雑誌』第131編第12号、2022年、27頁) 参照。
- (19) 山田崇仁「書評:『戦争の中国古代史』」(『立命館アジア・日本研究学術年報』4、2023年) 参照。